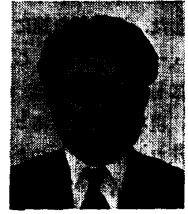


25周年をむかえて

—会長あいさつ—

尾関 雅 則



本年は、情報処理学会が創立されてから25周年という記念すべき年にあたります。近頃ではわが国でも4分の1世紀に相当する25周年の記念行事を盛大に行う風習が一般的になったようです。本学会でも、この記念すべき4分の1世紀をむかえ、この節目の年に当たって数々の記念行事が行われました。まず、去る5月の総会において、情報処理の分野でまだその基盤が固まっていない時代から前人未踏の問題にとりくみ、先進的な研究開発の成果をあげられた7名の方々の功労を顕彰する特別功績賞の授与が行われました。また本学会が、わが国を代表して加盟学会になっている「情報処理国際連合」(International Federation for Information Processing)の、今年の総会(General Assembly)が本学会の招聘によって9月上旬、東京で開催されました。そして、その総会に出席されたデンマークの Prof. Dines Bjorner 氏、及び米国の Dr. Karen A Dankan 女史の特別講演、並びに京都大学の 大野豊教授司会によるパネル討論を中心として「創立25周年記念特別講演会」が行われました。さらに、本学会の元会長を務められた穂坂教授に編集委員長をお願いして25周年記念論文を選定し本号をその特集号といたしました。このように、もり沢山の記念行事を順調に実施することができましたことは、献身的なご助力を賜った関係各位のお陰と、心から感謝を申し上げる次第であります。

ところで、今から25年以前の本学会が創立された1960年頃は、どんな時代であったのでしょうか。ちょうどその年の1月に、わが国オンラインシステムのはしりともいわれている国鉄の「MARS-1」が使用開始されております。今日とはくらべものにならないほど小さなもので1日の取り扱い座席数2000、端末の数20数台、対象列車の本数4列車というような、ささやかな実験システムであったわけです。このようなささやかなレベルからはじまったコンピュータの歴史も、1966年からはじまった大プロが完成する頃には、ようやく一つの産業レベルに近づいたと考えられるに

至りました。もっともその「超大型電子計算機」が目標とした性能が、和算命令実行時間を50nS、主記憶の容量を2MB、そしてバーチャルメモリとマルチプロセッサの機能を実現できることというものであったことを思い、またそれが近々10年にもならない、ついこの間のことであった事実を考えると、まったく隔世の感がいたします。

また、本学会の使命のひとつでもある国際会議をはじめ主催したのが、1972年の日米コンピュータ会議であり、それから僅か8年後の1980年には、IFIPの Congress' 80 を主催するようになったことを思うとき、時代の流れ、時の勢いというものを感じないわけには参りません。

このように急激に発達したコンピュータの進歩の足跡をきわめて単純に表現すれば、最近のマイクロコンピュータ出現以前まで、それは「より大きく、より早く」という機能、性能の追及とその実現であったといっても過言ではないでしょう。すなわち、コンピュータの黎明期に現われた U-1 とか UFC からのはじまって、1401 や 7070 の時代、360 から 370 を経過して今日の 30XX 時代へと、めざましく変化してきました。そして、この傾向は第5世代にむかって、ますます顕著になってゆくことでしょう。

一方、1970年に出現したパーソナルコンピュータは、はじめは4ビットのゲームマシンという「おもちゃ」であったものが、急速に進展して8ビット、16ビットとなり、もう32ビットも時間の問題となってきました。この小さなシリコンチップ上に実現された新しい世界は、従来のメインフレームコンピュータを中核とした旧世界が「ソフトウェアの危機」に悩んでいる間に、また「おもちゃ」と思って重要視していなかったうちに、どんどんと、自分の世界をつくりつつあるようにみえます。ここに至ってコンピュータは歴史上はじめて、本当にその値段が下がったといってもよいでしょう。個人でも専有できる値段のコンピュータであるパソコンの性能は、一昔まえの大型コンピ

ュータのそれを、はるかに凌駕するようになってきました。近年、急速にさかんになりつつある OA もニューメディアも、このようなパソコンの出現をベースにしていることは、明らかなことです。

現在は、まさにコンピュータの世界でも新旧の潮の流れが激しくぶつかり、渦を巻いて大きなエネルギーとなり、情報システムのあり方を変え、そのことによって世の中のあり方まで変化させてゆくような時代に際会しているのだといえるでしょう。

かつては、ひとつの OS の下に世界が動くシステムが、唯一のコンピュータシステムであったのに対し、現代は多くの OS が、最小限の規約をまもりながら、ひとつのシステムのなかに共存しうる時代へと、変貌してゆく過渡期なのかもしれません。「集中から分散へ」、「ハイアラキからネットワークへ」、というのは、単にコンピュータの世界だけのことでなく、一つの時代思潮の趣きさえ呈しはじめております。

このようにコンピュータの大衆化は、ますます進み、パソコン時代に育った現在の中学生在が社会人となる 1990 年代には「コンピュータ、リテラシィ」が現実のものとなることは間違いないさそうです。ここに至れば、かつては一部のコンピュータ・テクノクラートにリードされてきた情報システムのあり方も、大きな変化をとげなければならないこととなるでしょう。そしてさらに、このように分散され、大衆の必需品となった新しいコンピュータを相互に結び有効に通信を行うことができるような、新しいネット・ワークの出現は不可欠のものとなるに違いありません。このことはまた永い間、国家が独占的に運営していた通信事業の自由化を促進させている真の原動力なのでしょう。今から 40 年以上の昔に行われた定額灯の廃止という制度の変更が、電灯会社を電力会社に変え、今日、日本においては 6 兆円の規模に成長した家電産業の出現をもたらした前例を思いおこすまでもなく、新しい通信をめぐる未来の世界は大きく変化するであろうことが容易に想像できることです。情報処理の世界もようやく統制経済時代を卒業して自由主義経済の時代に突入で

きる位、豊かに成長したのだということもできるのかもしれません。

しかしながら、このような世界が現実化されるには、少なくとも次のような大きな問題が解決されなければならないと考えます。その第一は通信とコンピュータの融合であります。通信はもともと統制的な運営の中で発達してきた世界であります。これに対しコンピュータは、はじめから自由競争によって進歩してきた世界です。この二つの世界が本当に一つのものとなり、C と C の境い目がまったく意識されない Communication の世界にアウフヘーベンすることは大変難しい課題でありましょうが、最も重要な事項でありましょう。第二はソフトウェアの生産、流通の効率的な体制をどうするかということであります。少なくとも現在までのように大企業の中で少数のテクノクラートだけに頼ったやり方だけではその目的が達成できるようには思われません。新しいソフトウェアを効率的に生産、流通させる新しい体制がどんなものになるかを今から予測することは大変困難ですが、今までの工業的手法の中から解決の道を見出すことは大変難しいことのように感じます。

このような新しい趨勢に対応する本学会のあり方も今後の 25 年にむけて、その体制をととのえてゆく必要があります。高々 25 年の間に 2 万人以上の会員を擁する大学に発展した本学会は、さらに来たるべき新しい時代に対応すべく、あらゆる面で脱皮をとげることが要請されることでしょう。その際の基本となるフィロソフィは、第一に学会は会員のために存在するということです。その基本をふまえた上で産業界に対する研究開発上の先導的役割を見出してゆくことが重要な使命です。さらに IFIP との関わりから考えても国際的な活動の中核としての使命をどのように果たしてゆくべきかなど、数多くの重要な課題が山積している現状です。

どうかよりよき将来のために会員各位のご協力を心からお願いする次第であります。